

巻頭言

経験を語り合おう

細田眞司 日本精神神経学会副理事長
Shinji Hosoda

この夏にロンドンのキングス・カレッジ・ロンドン精神医学・心理学・神経科学研究所 (Institute of Psychiatry, Psychology and Neuroscience) を訪れ、エキスパートの研究者のお話を聴く機会を得た。それぞれの先生の研究実践を聴くと、イギリスの研究が臨床感覚を反映したものであることがわかる。さらに、同研究所に日本から留学中である先生の現在取り組んでいる研究のプレゼンテーションからは、精神医学研究の新しい息吹を感じ、思わず素朴な質問を投げかけている自分がいるのに驚くのであった。

最先端の研究を知り、さらに、日頃から考えていることを言葉にして語り合う機会を得ると、診療にも新たな視点で臨めるような気がする。

自分を振り返ると、10数年アルツハイマー型認知症の家族と生活をしているが、そのことを話すと、同じような体験をしている精神科医がとて多いのである。考えてみれば、80歳を超えれば30%の人が認知症とともに生きるのであるから、私と同じような経験をしている精神科医はたくさんいるはずである。私の地元の高橋幸男先生が「認知症はこわくない」(NHK出版)に書かれているように、家族との関係の悪循環から認知症のBPSDなどの症状が惹起されることを実感している。また、自分の診療において患者さんやその家族、関係者との話でも同じことが起きていることをさらに追体験するし、自分の治療方針やサポートの糧になっている。認知症の家族を抱える精神科医の体験をまとめたら、新しい認知症観が生まれるのではないかと夢想するのである。

15年前になるが、教育現場で教師の性的犯罪があり、全国的に報道された際に、緊急支援にかかわる経験をした。生徒、保護者へのケアだけでなく、教師たちの傷つきと疑心暗鬼などの混乱した状況に心理士とともにチームで介入した。そして報告、提言を教育委員会に提出し、再発を防止するための行政の審議会を設置し、教師のメンタルヘルス、報道機関への提言を答申するまでの過程にかかわった。その経験から、教育現場でもコンサルテーション技術が重要であることを痛感し、心理士たちと研究会をはじめた。その研究会は12年で100回以上となった。いじめ、虐

待、性的被害、不慮の事故、自殺、教師の不適切な行為などにどのようにかわるか、有効なコンサルテーションによって予防的かわかりができないかを事例を通して議論を繰り返した。その成果の一部を「学校危機とコンサルテーション」(新興医学出版社)として上梓し、幸い多くの方々から参考にしていただくことができた。この本は学術集会ならば、シンポジウムではなく、一般演題だと感じる。整った言説ではなく、未完の開かれた言説だからである。

私が、日々の日常臨床や研究で疑問に思ったり、経験を共有したいことを演題タイトル風に列挙すると、「電子カルテと精神療法」「精神科医の経験——認知症の家族を抱えて」「中年以降にはじめて治療に結びついた統合失調症治療の経験」「うつ病治療の終結と再発への対処」「診療所における悪性腫瘍に罹患した人、家族の語り」「学会広報委員会の活動——より良い報道に向けて」「家庭裁判所での精神科医の役割」「障害者職業センターの利用経験」「認知症初期対応チームの経験」「高齢者施設での精神科コンサルテーション」「医療計画の策定における精神科医の役割」「初期研修、専門研修の経験——研修する側と指導する側のそれぞれから」「島根県精神科医懇話会の歴史と経験」「島根県精神科医キャリアネットワーク事業」などである。精力的に研究に取り組んでいる会員の先生方はさらに多くのことを語り合いたいのではないかと想像する。

本学会では、2017年名古屋大会(大会長:尾崎紀夫先生)、2018年神戸大会(大会長:米田博先生)と一般演題を多く募集する試みがなされ、約350演題が発表された。来年の新潟大会(大会長:染矢俊幸先生)では、1,000演題をめざす方針が打ち出されている。ほかの基本領域学会と比較すると一般演題が極めて少なく、7,000人の参加者を考えれば1,000演題程度は当然の数である。

日々の臨床や研究活動の中で感じる疑問、課題を言葉にして、ほかの専門家と語り合うことはとても魅力的なことである。これまでの充実した特別講演、シンポジウムに加え、多くの一般演題が応募され、参加者が自らの経験を語り合う場が充実するなら、新潟大会はこれまで以上にすばらしい学術集会となるだろう。